

# 児童の問題意識を生かした道徳授業の工夫改善

なかの道徳授業研究会

## 1 研究主題設定の理由

学習指導要領改訂から5年が経過した。道徳の時間が「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）として実施されて6年目になる。どの学校でもある一定レベル以上の道徳授業が実施されるようになってきている。一方、評価を通知表や指導要録に記載することだと意識し、ワークシートを連発するような評価のための授業や、教科書付属の指導書をなぞるような道徳授業も散見される。また、学習指導要領に例示された問題解決的な学習を意識するあまり、設定した問題が児童のものになっていなかったり、児童の思考と大きなズレがあったりすることは大きな課題である。手段であるはずの問題解決的な学習そのものが目的となってしまう授業も残念ではあるが存在する。

道徳授業の特質を踏まえた学習とは、道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習である。その際、児童自身が問題意識をもつことは有効な手段の一つである。

道徳授業における児童の問題意識を児童が物ごとを自分のこととして考える思考ととらえた。例えば、道徳の授業を楽しみにしている。考えたいと思っていることがある。道徳授業で扱う教材の人物に自分を重ねて考えようとしている。自己の生活場면을思い浮かべようとしている。自分と関わりのある集団や社会について考えようとしている等の児童の姿である。

この児童の高まった問題意識を授業に生かしていくことで、道徳授業の特質を踏まえたよりよい授業への工夫改善を目指すべく、研究主題を「児童の問題意識を生かした道徳授業の工夫改善」とし、中野区全体の道徳教育、道徳授業の充実を志す仲間と研究を進めた。

## 2 問題意識を高める実践事例

これまでの研究経過の中で共有してきたことを踏まえ、児童の立場に立った問題意識を高める実践事例を再度共有した。

- (1) 効果的な授業の予告の事例
- (2) オリエンテーションを工夫した事例
- (3) アンケートを有効活用した事例
- (4) 導入での工夫を生かした事例
- (5) 複数時間扱い・連続時間扱い等指導計画を生かした事例
- (6) 教材を活用した事例
- (7) 学級経営を生かした事例 等

## 3 問題意識を生かす実践事例

更に、問題意識に着目した研究同人がこれまでその問題意識を生かした道徳授業実践について各々の感じている成果と課題について共有した。

- (1) 高めた問題意識を授業中にどう継続させるか？
- (2) 問題意識をより児童のものにするには？

- (3) 事前調査（特にアンケート）等実施の際、留意する点は？
- (4) 学習の中で児童と問題意識を確認するには？
- (5) 高めた問題意識についての考えを児童にどう問うか？
- (6) 問題意識を生かすことについての検証をどうするか？ 等

### 3 授業実践事例（第6学年）

#### (1) 授業概要

##### ① 主題名 使命を果たす【C：よりよい学校生活，集団生活の充実】

##### ② ねらいと教材

ねらい：操縦桿を強く握り締めたときの機長の気持ちを考えることで，集団の中での自分の立場や役割の大切さに気づき，最後まで自分の責任をしっかりと果たそうとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

教材：離島の命を守って

##### ③ 教材の概要

新聞の夕刊のコラムに小さくのっていた記事をきっかけに作成された自作資料である。学習指導要領改訂後も当時かかわった道徳授業を推進する実践者の間では秀逸の教材として語りつながれてきている。

本教材について作者はこう語っている。「当時，人々からは，自衛隊ということで，難しい目で見られることもあり，子供たちは学校に通いにくい状況のようであったと思います。そんな中で，ただひたすら，人々の命を救うために全力を尽くしている姿に胸をうたれました。急患搬送は危険も伴います。だからこそ，日々訓練をしています。それでも，起こってしまった事故・・・あと一度飛べばヘリコプターを降り，家族のもとに帰るはずだった機長の無念を思います。」

南西諸島を守る130部隊，毎日毎日，繰り返し着陸訓練をする隊長がいた。ある日，降りしきる雨の中，救助に出動する。強い雨の中を飛行中，操縦桿を強く握りしめ直し，現地に赴き患者を搬送する。患者を引き渡し，ヘリコプターの機体をなでながら，「ふうっ。」とため息をつくのであった。

あと1日最後のヘリコプター飛行で墜落事故が起きる。事実と向き合って考えることのできる教材である。

##### ④ 問題意識を持たせ，生かす工夫

教材と向き合った際に，心に抱いた思いを大切にし，そのことを発問に生かすことで，仲間と交流し合いながら自分の考えを深めていく。そのことの相乗効果で，一人ひとりが自分の考えをしっかりともち，それを全員がのびのびと表現することを目指す。

##### ⑤ 展開の概要

## <導入>

○ヘリコプターの音を流して、興味関心を高めると共に、南西諸島を守る自衛隊130部隊について説明する。

T：何の音だと思いますか。 C：ヘリコプターの音。

T：南西諸島に向かっていくヘリコプターがあります。その機長さんの話をします。みなさんは、機長さんの気持ちになって聞いてください。聞いた後にみんなで話し合ってみたいところを考えておいてください。

○教材「離島の命を守って」の範読を聞き、話し合う。

★BGMで激しい雨の音を流しながら、教師による語り聞かせで教材提示をする。

## <展開>

○資料の補足説明をして、みんなで話し合いたい場面を考える。

T：天気の良い日に出動要請がありました。そして、患者を運びました。赤ちゃんが生まれました。ヘリコプターをなでている機長さんがいます。

T：みなさんはどの場면을話し合ってみたいですか。

訓練の場面…1人 患者を運んでいる場面…25人

ヘリコプターをなでている場面…8人

### 1 【訓練の場面】

C：機長はベテランですごいのに、何で訓練しているのだろう。

C：訓練して、なるべく早く助けたい。 C：本番は緊張するから。

C：悪天候でも怖くないように。

C：命がかかっている。いつ失敗するかわからないから、責任を感じて何度も練習した。

### 2 【患者を運んでいる場面】

C：その日は沖縄が雨で大変だったけど、二人の命を守るために責任をもって。

T：どんなところを話し合いたいのか？ C：操縦桿を握っているときの心情。

C：患者がいて、助けるために動いているから、天候に左右されたら仕事が成り立たない。 T：だから？ C：絶対に助けたい。

C：今までの訓練の成果を出したい。 C：患者の命がかかっているので緊張している。

C：自分の手に2人の命がかかっているから、歯を食いしばって頑張る。

C：自分1人で何人もの命を預かっている。今まで大丈夫だったんだから、悪いことを考えないで頑張りたい。 C：患者さんが頑張っているから、自分もがんばろう。

C：この人を助けないと、この仕事をやっている意味がない。 T：どういうこと？

C：貴重としての責任があるから、責任を果たしたい。

C：赤ちゃんがお腹の中にいて、その子を産むためにお母さんが苦しんでいるんだから。

T：機長は怖くないのかな。

C：事故が起きなくても、お母さんも頑張っているんだから、助けないと。

C：彼は、全員を守るという責任をもっているから。

T：自分の手に責任がかかるって大変じゃない？ C：訓練しているから、自信がある。

C：自然には逆らえないけれど、自分の最善を尽くさないで、どうするんだ。

C：機長として今までがんばってきたから、全力を尽くそう。

C：訓練の成果を発揮しよう。怖いけど、それに打ち勝つぞと自分に言い聞かせた。

T : まだもう少し言いたい人いませんか？

### ③ 【ヘリコプターをなでている場面】(中心発問)

T : ヘリコプターをなでている場面で話し合いたいことは？

C : なでているときの彼の気持ち。 T : どんな気持ちだと思う？

C : 晴れ晴れとした気持ち。

C : 緊張がとけて、安心した。ほっとした。

C : はじめはお産をするとは思わないで運んでいたから緊張してなかったと思うけれど、それに気づいてからは緊張した。うまくいって、すっきりした。

C : 訓練しておいてよかった。

C : 雨の中で全力を發揮してよかった。ぼくと一緒によかった。

C : 何とか救えて、緊張がとけた。この仕事をしていてよかった。

T : どうしてそう思うの？ C : 人の役に立つ仕事ができただから。

C : もう1つの任務が達成できてよかった。

C : 助けられたんだあ！見送った後に、「やったあ！」って叫びたい。

C : たくさん訓練をしていてよかったなあ。

C : 先生、他に気になるところがあるんですけど。 T : どうぞ。

C : 最後に「機体をなでた」とあります。

T : 他にもまだありますか。 C : 機長が、言葉にならなかったのはどうしてだろう？

T : どうしてだと思おう？ C : あまりにもうれしいから。

C : 赤ちゃんも生まれて嬉しいし、患者さんも無事で2倍嬉しい。

C : どの部分ですか？ C : 言葉にならなかったのはどうしてという場面。

C : やり遂げてうれしい。

### ○自分を振り返る。(展開後段)

※中心発問の後、導入と教材提示後に高めた問題意識について触れてから発問をする。

◇みなさんも、いつもがんばっていますね。どんな気持ちで自分の役割に取り組んでいますか。

A君に聞いてみたいです。A君はどんな役割ですか。

A児が指名された途端、子供まつりで、実行委員として苦労しながらクラスのお店の提案を何度もしていったA児の働きぶりを学級の全員が知っていて、うれしそうに見つめる姿があった。本時のねらいを学級全員が意識しているようだった。

A : 子供まつりの実行委員で、代表委員会でお化け屋敷に当選できなくて、別のお店も考えて、みんなに申し訳なくて、大変だった。

T : 何度も代表委員会に提案して、何度も考えていったよね。やってみてどうだった？

A : お化け屋敷はできなかったけれど、終わってよかった。

C : 家でやるときに集中してやった。 T : どんな役割ですか。 C : 趣味です。

T : クラブとか委員会ではありませんか。

C : クラブ長で、前よりできたと褒めてくれた。

T : 2回目の時は、どんな気持ち？ C : やってやろうじゃないか！っていう気持ち。

C : クラブで書記なんですけど、字が汚いとかでかいとか言われる。でも、文句を言う人もすごい汚い。 T : そういう気持ち、わかります。

C：卓球クラブで、ピンポン球を持ってくるのを忘れてしまった。次は、もっと道具をしっかりと取りに行かなきゃって思った。

C：放送委員の仕事をやって、もし間違ったらどうしようと思った。でも、無事に終わってよかった。 T：どんな気持ちでやっているのかな。

C：言葉を間違えないように頑張ろうと思っている。

C：囲碁・将棋クラブで先生に注意された。次は褒められるようにがんばった。

T：みんなが大事な役割をもっていますね。2学期3学期のみんなのがんばりを楽しみに行っています。

## ○評価

○操縦桿を強く握り締めたときの機長の気持ちを共感的にとらえている学習状況を把握する。（中心発問）

○学校生活の中での自分の役割や、それを実行しているときの自分を振り返っている学習状況を把握する。（展開後段）

## （2）考察

### ① 問題意識を「高める」、そして「生かす」にかかわること

子供が話し合ってみたい場面を授業展開に生かして話し合いを進めていくことができた。その結果、子供自身が一つ一つの場面に「なぜ」、「どうして」というこだわりをもつようになり、より深い話し合いに導くことができた。子供自身が「考えたい道徳、話し合いたい道徳」に迫ることができたと考える。

### ② 道徳授業の充実にかかわること

学級経営の中で望ましい人間関係を構築しながら、思ったことを素直に表現できる力を育ててきた成果が十分に出ていた。子供相互のかかわり合いを各教科の授業の中でも育んでいくことの重要性を改めて感じた。

A児の実態を把握し、展開後段の冒頭で意図的に指名したことで、これまで学級で共有していた「集団生活の充実（役割と責任）」にかかわる体験を学級全員の児童が思い起こすことができた。個の願いをもって意図的に指名することは、一人ひとりのよさが道徳授業の中で、学級全体に生きてくることにつながり、道徳授業を充実させていく上でも重要なことであることが分かった。

写真や地図の提示で「事実」という重みと向き合い、子供たちは、登場人物の使命感に自分を重ね合わせていた。自作教材には、自作する際の明確な意図が表れていた。「集団生活の充実（役割と責任）」に十分迫れる教材であるが、「協力」という視点を設けていくと、さらに磨かれた洗練された教材になるのではないか。

## 4 道徳談議

本研究会は道徳授業、道徳教育の充実に関し、志を同じにする同行の仲間である。時に触れ、道徳授業、道徳教育に対する思いや願いを語り合ってきた。その目的は自身の道徳指導力向上に加え、学校全体や地域の道徳指導力向上にあるからである。そして新たな提案ができると願っているからである。

今年度も継続して「道徳授業における『問題解決的な学習』と『問題意識』の違い」をテーマとして語り合ってきた。その上で、問題意識を「生かした」から問題意識が「生きる」に研究同人の意識は大きく変化している。そのことをお互いの実践に生かし相互研鑽していくことが求められる。そして、このような道徳授業に対する思いや願いの深まりは「道徳談議」の重要な役割である。

## 5 成果と課題

全教育活動の中で、道徳授業にかかわる問題意識の醸成を常に意識した実践では道徳授業の特質を損なうことなく充実した授業が展開できる。児童の問題意識を高め、さらにそれを生かすことを前提として、「問題」が児童のものになっていなければならないというこれまでの主張は今年度も揺るぎなかった。

「問題意識を生かす」学習展開は、その「問題意識」について授業の中の様々な段階で子供に確認したり、意見を求めたりすることが重要である。特に、問題意識がどの程度子供のものになっているか、そしてその問題意識を生かせるような教材選定になっているか、そして発問を含め有効な学習展開になっているか、そして目の前の児童は授業の中でどう捉えているのかということの把握に努めていくことが明確な指導の意図をもつ上でも重要である。なぜなら、授業者自身が授業の中で児童にどの程度確認したり、投げかけたり、意見を求めたりするということの可否、充実につながるからである。

「考える道徳、議論する道徳」というキャッチフレーズが独り歩きした中、現在は「討論しなければならない」というような大きな誤解が収まっている状況であり、そのことに一石を投じたい。本来、子供自身がこの問題をみんなで考えたい、話し合いたいという「考えたい道徳、話し合いたい道徳」と思うようなことこそが、道徳授業をみんなが楽しみにし、充実していくことであると考えていることはこれまでの、そして本年度の実践からも揺るぎない。

今後は、「問題意識を生かす」から「問題意識が生きる」授業への転換を目指したい。そのために、児童自身が問題意識を高め、「それを生かす」から「それが生きる」道徳授業へと進化する授業実践に取り組んでいく。